

群 教 セ	H01 - 01
	平14.207集

友達とかかわりルールを守って楽しく 遊びを進める幼児の育成

—— ごっこ遊びにおける環境の構成の工夫を通して ——

特別研修員 一ノ瀬 ます代 （桐生市立天沼幼稚園）

《研究の概要》

本研究は、ごっこ遊びにおける環境の構成を工夫することにより、友達とかかわりルールを守って楽しく遊びを進める幼児を育成しようとしたものである。具体的には、幼児の思いや動きをつなぐための環境の構成を物的環境・人的環境の両面から工夫し、幼児が友達とかかわり互いの思いを出し合って遊び方を考え、そこから生まれたルールを受け入れたり守ったりして、遊びを進めていく幼児の変容をとらえようとしたものである。

【キーワード：幼児教育 友達とかかわり ルール ごっこ遊び 環境の構成の工夫】

主題設定の理由

他の人の存在に気付き、かかわりを求め始める幼児期、幼稚園においても初めは個々に遊んでいた幼児が、次第に他の幼児と言葉を交わしたり、同じ物を持って遊んだりするなどのかかわりをもつようになる。しかし、一緒に遊ぶようになると幼児は自分を主張し、物の取り合いや考えの相違などからトラブルになることが多く、友達とかかわりは一人では味わうことができない楽しさも経験するが、自分の思い通りにならないという体験もする。このようないざこざや葛藤^{かっとう}を繰り返しながら友達の思いに気付いたり、ルールを守ると友達と楽しく遊びが進められることが分かるようになる。

本学級には2年保育5歳児19名が在籍している。進級当初は、自分のやりたいことがあると思いのままに行動してしまう幼児の姿や、友達と一緒に既成のルールを守って遊ぶことはあるが、自分たちのイメージに合わせて遊びを進めることは少ないなどの様子が見られた。また、一人一人の幼児について見ると、活動への取組は自発的で、遊びへの興味や関心は持続する。しかし、自分の思い通りにならないことには取組もうとせず、遊びからもすぐに抜けるなどの姿が目立った。このような幼児が友達とかかわり、楽しく遊びを進めるためには“相手の気持ちに気付く”“思い通りにならなくても我慢する”ことなどをはぐくんでいくことが大切であると考え、これまでの実践を振り返ってみた。すると、幼児の友達関係の広がりを促す環境の構成が十分でなく、そのために、いろいろな友達の思いを受け止めて、遊びを進めようとする経験が少なかったのではないかとわかった。

そこで、幼児が遊びの中で何を楽しんでいるか、遊びをどのように進めようとしているか、友達関係は互いを受け入れ合っているかなどの様子をとらえ、幼児の思いや動きをつなぐための環境の構成を工夫すれば、幼児はいろいろな友達とかかわり、イメージに合わせて遊びを進めていくごっこ遊びの中で、必要感に迫られてルールを生み出し、受け入れたり守ったりして楽しく遊びを進めるようになると考え、本主題を設定した。

研究のねらい

ごっこ遊びにおいて、幼児の思いや動きをつなぐための環境の構成を工夫すれば、友達とかかわってルールを生み出し、受け入れたり守ったりして、楽しく遊びを進める幼児が育成されることを実践を通して明らかにする。

研究の見通し

- 1 気の合う友達との遊びを繰り返している時期には、多くの幼児が興味や関心をもっているものを取り入れ、教師も一緒に遊ぶことにより、いろいろな友達とのかかわりが広がって、思い通りにならない経験をしながらも、楽しく遊ぶようになるであろう。
- 2 いろいろな友達とかかわって遊んでいる時期には、表現しやすい素材を用意したり、遊具の数量を調整したり、幼児の思いが伝わるよう仲立ちをしたりすることにより、幼児は考えを出し合い、葛藤^{かっとう}を経験したり、ルールを生み出したりしながら遊ぶようになるであろう。
- 3 共通の目当てをもって友達と遊んでいる時期には、イメージに合わせていろいろな使い方が可能な、大きめの材料を用意したり、幼児の要求に応じて援助したり、取組を認めたりすることにより、友達とかかわって考えを実現しながら、ルールを守って楽しく遊びを進めるようになるであろう。

研究の内容と方法

1 研究の内容

(1) 友達とかかわりルールを守って楽しく遊びを進める幼児について

この研究におけるルールとは、遊びの中で不都合なことが生じたときに、幼児が考えてそれぞれが納得したものや、遊びをさらにおもしろくするために、自分なりに考えたり友達と相談したりして決まったものなどとする。このように、幼児が遊びを進める中で必要感に迫られてルールを生み出し、受け入れたり守ったりして友達と楽しさを共有しながら遊ぶ幼児を『友達とかかわりルールを守って楽しく遊びを進める幼児』と考えた。

そして、友達とかかわりをもち、ルールを守って楽しく遊びが進められるようになるまでの幼児の具体的な姿を次のように押さえた。

め ざ す 幼 児 像	具 体 的 な 姿
友達とのかかわりが広がり、 思い通りにならない経験をしながらも楽しく遊ぶ幼児 ——— 見通し 1	・ 友達や先生の動きや言葉をよく見たり聞いたりする。 ・ 友達のおもしろそうな遊び方をまねて遊ぶ。 ・ 遊びに進んで参加し、なりたい役になって遊ぶ。 ・ 感じたことや思ったことを言葉で表し、友達に言う。 ・ 自分なりに考えたことをかいたり作ったりして表現し、それを使って遊ぶ。 ・ 思い通りにならなくても我慢をして遊ぶ。
考えを出し合い、葛藤 ^{かっとう} を経験したり、ルールを生み出したりしながら遊ぶ幼児 ——— 見通し 2	・ 友達の言葉や動きを受け止めたり、反対したりして考えを表す。 ・ 役割を受けもったり交代したりして遊ぶ。 ・ 遊びに使うものを友達と一緒に作る。 ・ 友達に考えを伝えたり、確認したりして折り合いをつけながら遊ぶ。 ・ おもしろくなるよう遊び方を考える。

友達とかかわって考えを実現しながら、ルールを守って楽しく遊びを進める幼児 ——見通し3	・友達と相談したり、考えを受け入れたりして遊び方を決めて遊ぶ。 ・仲間意識が高まり、準備や片付けなどをみんなでやる。 ・遊びに必要な物や自分たちで用意しながら遊ぶ。 ・友達の気持ちに気付けて待ったり、譲ったりする。 ・決めたルールを守って遊ぶ。
--	--

(2) ごっこ遊びにおける環境の構成の工夫について

幼児は映像などを通して、実際の生活で体験したりしたことあこがに憧れをもつと、自分自身がその役になりきって表現するようになる。なりたい役のイメージに合わせて動きや言葉などをまねたり、そのものらしくなるよう特徴的な物を持ったり、身に付けたりして表現することを楽しむ。そして、多くの幼児が共通に体験していることはイメージが伝わりやすく、それぞれの幼児が役になりきって遊ぶごっこ遊びとして展開されることが多い。本研究では、幼児がなりたい役になって表現することだけでなく、遊びに必要な物を作ったり、場を用意したりすることもごっこ遊びととらえることにした。遊びに必要な物とは、それがあると遊びがより楽しくなったり、仲間意識がもてるようになったりする物と考えた。また、場を用意するとは、遊びのイメージに合わせて遊具などを使い、考えていることを具体化したり、友達と共有したりするためのものと考えた。

幼児は園生活の中で同じ環境に触れても、幼児の興味や関心はいろいろなものに向けられていて、一人一人の幼児の受け止め方は様々である。降園後の出来事なども、幼児にとって印象的な経験になっていることがあり、幼児の思いや動きは多様なものになる。このような幼児の思いや動きを教師が受け止め、友達とのかかわりが広がるようにしたり、互いの考えや動きを認め合えるようにしたり、遊びをつくり出して楽しく進めていけるようにしたりすることを、幼児の思いや動きをつなぐことと考えた。

環境の構成については、幼児の興味や関心の方向は何に向いているか、発達の実情に合っているか、また、発達にとって必要な経験は何かなどの幼児理解に努め、物や場・時間などを構成したり、教師が環境にかかわる姿を見せたり、幼児とともに活動したり、友達の言動などに気付かせたりして、遊びが楽しく展開されるような状況をつくり出すことと考えた。

2 研究の方法

研究の見通しに基づき、以下の計画で保育実践を行い、検証する。

(1) 実践計画

対 象	桐生市立天沼幼稚園 2年保育 5歳児 19名 (男児9名・女児10名)
期 間	平成14年6月～11月

(2) 検証計画

検証項目	検 証 の 観 点	検証の方法
見通し1	気の合う友達との遊びを繰り返している時期に、幼児が簡単に作れるような材料を用意したり、なりたい役になって遊べるような物を提示したり、教師も遊びの一員になって雰囲気盛り上げたりしたことは、遊びに加わってきたいろいろな友達とのかかわりが広がり、いざこざなども経験しながら	教師による観察や、他の教師から情報収集したものを

	遊ぶために有効であったか。	分析、考察する。 ・友達や教師への言葉 ・つぶやき ・遊びへの取り組み方
見通し2	いろいろな友達とかかわって遊んでいる時期に、幼児が考えを表現しやすい素材を用意したり、友達と譲り合って遊ぶよう遊具の数量を調整したり、幼児の思いが相手に伝わるよう仲立ちをしたりしたことは、友達との遊びを進める中で、葛藤を経験したり、ルールを生み出したりしながら遊ぶために有効であったか。	
見通し3	共通の目当てをもって友達と遊んでいる時期に、幼児が友達と力を合わせて作ったり、使ったりできる大きめの材料を用意したり、幼児が困っているときに手伝ったり、友達と協力して遊びを進める姿を認めたりしたことは、幼児が目当ての実現に向けて考えを出し合い、ルールを守って楽しく遊びを進めるために有効であったか。	

研究の展開

2年保育5歳児の教育課程 期、 期、 期において実践する中で“友達とのかかわりや遊びへの取り組み方”に視点を当てて幼児の実態をとらえ、ねらい・内容に則してめざす幼児の具体的な姿が達成されるよう環境の構成を工夫する。

桐生市立天沼幼稚園教育課程より抜粋

	ね ら い	内 容
期 6 「 7 月	○好きな遊びに進んで取り組み、いろいろな友達と遊ぶようになる。 ○自分の思ったことを相手に伝えながら友達と一緒に遊びを進めるようになる。	・友達とイメージを共有して遊ぶ楽しさを味わう。 ・遊びをおもしろくするものを作る。 ・友達と同じ物を持ったり使ったりして楽しく遊ぶ。 ・考えたことや楽しいこと、困ったことなどを友達に言う。 ・相手の気持ちが分かる。
期 9 「 10 月	○一緒に遊んでいる友達の気持ちに気づき、譲り合って遊ぶようになる。 ○目当てをもって取り組み、考えたことを自分なりに表現するようになる。	・考えを伝えたり、友達の話をよく聞いたりする。 ・友達の動きに関心をもって遊ぶ。 ・役割を受け持ったり、交代したりして遊ぶ。 ・興味のあるものを使い、友達と遊び方を考えながら進める楽しさを味わう。 ・遊びに必要なものを作る。
期 11 「 12 月	○友達と共通の目当てをもち、話し合ったり協力したりして遊ぶようになる。 ○自分たちで考えた遊び方を守り、楽しく遊びを進めるようになる。	・遊び方について互いの考えを出して話し合う。 ・遊びに必要な遊具を用意したり、イメージに合わせて場を整えたりする。 ・友達のよさに気付いたり、考えを認めたりする。 ・仲間で取り決めたことを守って遊ぶ。 ・友達と力を合わせて遊ぶ。

ごっこ遊びにおいて、幼児の思いや動きをつなぐための環境の構成

	物的環境の構成の視点	人的環境の構成の視点
見通し1の時期	・遊びがイメージしやすい物を目につくような所に置いたり、自分で作ってみられるよう材料を用意したりする。 ・遊びの場はいろいろな幼児の目に触れやすい場所に設定したり、遊びの状況に応じて場を広げたり、移動したりする。 ・遊び方を変化させたり、遊びが発展したりするような遊具を、近くに置いてきっかけをつくる。	・幼児が興味や関心をもっているものを目の前で作ったり、話題にしたりして幼児の気持ちを刺激する。 ・遊びに参加して一緒に役割を受け持ち言葉や動きで楽しさを表したり、周りの幼児に誘い掛けたりする。 ・遊びのイメージが共有できるよう、遊び方について個々の幼児にたずねながら、思いを広げていく。
見通し2の時期	・幼児が自分の考えたことをすぐに表現できるよう、いろいろな素材を集め、使いやすいように分類しておく。 ・友達と遊具を交代して使ったり、材料を分け合ったりできるよう、それらの数量を調整する。 ・遊びをおもしろくするために要求してきた遊具や材料を幼児と一緒に準備する。	・幼児が表現したものを認めたり、工夫しているところをほめたりして、表現することに自信がもてるようにする。 ・いざこざのときには、互いの言い分を聞いてやりながら相手の気持ちに気付かせ、解決する方法を考えさせる。 ・一部で決まった遊び方などを、全体の幼児に知らせ共有できるようにする。
見通し3の時期	・幼児のイメージに合わせて、いろいろな使い方ができる素材を用意し、友達と力を合わせて遊びに必要なものが作れるようにする。 ・幼児が実現できず困っているときには、ヒントになる物を示したり、使いやすい用具や材料などを準備したりする。 ・幼児が試行錯誤しながら遊びを進める楽しさが味わえるよう、時間を保障する。	・友達と力を合わせて遊びを進めている姿を見守ったり、共通のイメージで進んでいるかを確認したりする。 ・遊びが停滞したり、必要な物が作れなかったりしたときは、教師も一緒に考えたり、手伝ったりする。 ・友達の考えを受け入れたり、譲り合ったりして遊ぶ様子を認める。

研究の結果と考察

- 1 幼児が簡単に作れるような材料を用意したり、なりたい役になって遊べるような物を提示したり、教師も遊びの一員になって雰囲気盛り上げたりしたことは、遊びに加わってきたいろいろな友達とのかかわりが広がり、いざこざなども経験しながら遊ぶために有効であったか

「魚釣りごっこをする」 6月18日～6月25日

魚の歌を喜んで歌っている幼児と一緒に、画用紙で魚を作った後、割り箸と磁石で釣り竿を作る。「それ魚を釣るのでしょ。」「やったことある。」などと興味を示した3人の幼児が、魚を段ボール箱に入れて釣り始める。他の幼児も興味をもち、集まってきて押し合いになる。おもしろそうな遊びに交ざりたいという幼児の気持ちを受け止め、全員で廊下にある大型積木を使って囲いをつくり、魚釣りが楽しめるようにした。

釣り堀のイメージをもった幼児が積木の上に立って魚を釣ると、周りの幼児も同様に立ったり腰掛けたりして魚釣りをしていたが、突然「全部釣っちゃだめっ。釣れなくなっちゃうよ。」とP児が怒り出したので、他の幼児は驚き困った表情になった。そこで、P児の気持ちをみんな

なで聞いて、楽しく遊ぶためにはどうしたらよいか一緒に考えた。M児は「もっと魚を作った方がいい。」とか「全部釣らないで少し釣ればいい。」などと自分なりの考えを出したので、それらの遊び方を全員で確認して遊びを続けた。

魚釣りを個々に楽しんでいる様子が見られたので、友達とのかかわりが広がるよう段ボール箱をコンロに見立て、教師が釣った魚を焼く。すぐにJ児が「バーベキューしたことあるよ。」と関心を示し、「やりたい。」と言って魚焼きに取り組んだ。教師は他の幼児にも伝わるよう「これ焼いてください。」と大きな声でJ児にたのみ、遊びが広がったことを知らせるようにした。すると、すぐに「焼いてください。」と釣った魚を持って行って、バーベキュー屋さん^{さん}と釣る人の役になって遊びが始まった。C児が画用紙でお金を作ってきて、魚を焼いてもらったお客さんに「おつりです。」と言って渡し始めたことから、次第にお金のやりとりが幼児の間に広がり、いろいろな役になって遊びを楽しむようになった。

翌日は、気の合う友達を誘って遊びの場を用意し、前日と同じ役になって遊び始めた。役に慣れてくると遊び方に変化が見られるようになり、テーブルやいすを運んできて「ここで食べられます。」とお客さんに声を掛けたり、「お皿持ってくるね。」と同じ役の友達に声を掛け、考えを実現しながら遊ぶ様子が見られた。他の幼児は、遊び方が変化したことを友達の様子から見て取ったり、一緒に遊んでいる教師の動きや言葉を通して気付いたりして、遊びの広がりを受け入れていった。

以上のことから、魚の歌が大好きな幼児と一緒に絵をかいて魚を作り、釣り竿を用意した物的環境の構成が、多くの幼児の興味や関心を集め、魚釣りごっこへの参加を促したと思われる。また、段ボール箱を使って遊びを広げるきっかけをつくったり、人的環境の構成として教師が遊びに加わって楽しく遊ぶ姿を見せたり、思いを出し切れない幼児に働き掛けたりしたことで、友達とのかかわりが生まれていったと考える。このように友達の遊んでいる様子を見ることで遊び方が分かり、取り組んでみたくなる環境の構成が、いろいろな友達とかかわり、いざこざなども経験しながら遊ぶために有効であったと考える。

- 2 幼児が考えを表現しやすい素材を用意したり、友達と譲り合って遊ぶよう遊具の数量を調整したり、幼児の思いが相手に伝わるよう仲立ちをしたりしたことは、友達との遊びを進める中で、葛藤^{かつとう}を経験したり、ルールを生み出したりしながら遊ぶために有効であったか
「パーマやさんごっこをする」 9月3日～9月11日

夏休み明け、幼児が園生活のリズムを取り戻し、暑さを避けて友達と遊べるよう、集めておいた空き容器などの素材を分類し廊下に置いた。園庭で遊んだ後、友達とこの場所で製作をしていたG児は「先生見て、ドライヤーだよ。」と、洗剤の計量スプーンとプリンカップで作ったものを見せた。教師は「いいドライヤーだね。先生もきれいにしてもらいたいな。」と、発想を認めたり、作ったもので遊ぶきっかけをつくったりした。

G児がドライヤーをしていると、J児が「シャンプーする所をつくれば。」と言って、大型積木でシャンプー台を作り始めた。その様子を見た友達が「パーマ屋さんになっていい。」と加わろうとすると、G児は「今さあ。」と返事を渋った。教師は、幼児が自分の思いをどのように相手に伝えようとするか見守ることにした。G児やJ児の表情や態度から、断ることは良くないと思っている後ろめたさや、まだ代わりたくないという気持ちの間で戸惑っている感じが感じられた。返事を待っていた幼児は、なかなか「いいよ。」と言ってくれないので「レジしよう。」と言って、二人でレシートづくりを始めた。教師は「パーマ屋さんになったばかりで、もう少しやりたかったのね。」と、G児たちの気持ちを受け止めた後で、友達の気持ちにも気付くよう言葉を掛けた。そして、教師はその日の中で、学級全体の幼児に投げ掛け、それぞれの立場によっていろいろな考え方感じ方があることに気付くよう、具体的な場面を挙げて考えさせ

るようにした。幼児からは少し待っていてもらうとか、自分の気持ちを話すと、順番を決めるなどの考えが出され、他の幼児も友達の言葉をよく聞いていた。

パーマ屋さんごっこは、登園してきた幼児が始めたり、昼食後に相談がまとまって積み木を並べたりして続けられた。安全を考慮してはさみやヘヤーブラシは紙で作り、友達と譲り合って使うよう数は少なめに用意した。Ｌ児が「みんながまぜてくれない。」と訴えてきたので、一緒にパーマ屋さんの所に行ってみると、友達が「Ｌちゃんばかりパーマ屋さんになるんだもん。」と言う。教師はこのやりとりを見守ることにした。Ｌ児は友達からやり方を指摘され、少し涙ぐみながら話を聞いていたが「ごめんね。」と謝る。友達も「ごめんね。Ｌちゃん遊ぼう。」と言って続きを始めた。

幼児はパーマ屋さんになって髪をとかしたり、シャンプーをしたり、お客さんになったりして遊び、「今度、パーマ屋さんになっていい。」「その次はわたしね。」などと思いを伝え、確かめ合いながら役割を交代をして遊べるようになった。そして、ペットボトルに色のテープを詰めてシャンプーやムースを作ったり、テーブルを用意してパーマ屋さんの道具を置いたりするなど、友達が考えたことを受け止めて遊ぶようになった。お客さんに２～３人のパーマ屋さんが、代わる代わるリボンやカチューシャを結んでやる様子が見られたり、レジ役の幼児がお客さんを案内したりする姿も見られた。（図１）



図１ 役割を交代しながら遊ぶ幼児

以上のことから、いろいろなものがイメージしやすい素材を集めて分類しておいたことが、ドライヤーづくりに取り組むきっかけとなり、パーマ屋さんに行ったことがあるという家庭での生活体験がパーマ屋さんの遊びを楽しく展開させたものと考えられる。また、遊具の数量を調整したことで思い通りにならない経験をし、友達と譲り合ったり交代したりして使うと楽しく遊べることに気付いたものと思われる。このような物的環境の構成や、一人一人の幼児の気持ちを受け止めながら相手の気持ちに気付かせた、人的環境としての教師の働き掛けが、葛藤体験をしたり、遊びに必要なルールを生み出したりしたことに有効であったと考える。

３ 友達と力を合わせて作ったり、使ったりできる大きめの材料を用意したり、幼児が困っているときに手伝ったり、友達と協力して遊ぶ姿を認めたりしたことは、幼児が目当ての実現に向けて考えを出し合い、ルールを守って楽しく遊びを進めるために有効であったか
「電車ごっこをする」 11月１日～11月７日

朝から雨天のため、前もって集めておいた段ボール箱を、保育室の目に付きやすい場所に置いておく。２日前の園外保育で何度も見ることができた電車を、イメージしやすい大きさや形のものをたくさん用意しておいた。そして、幼児の登園してくる時間に合わせ、畳んであった段ボール箱を広げていると幼児が集まってきた。すぐに興味を示して、「電車みたい。」「作りたいい。」と言うと、段ボール箱をいくつも並べたり、箱の中に入ったりして遊び始めた。そして、幼児は電車に乗ったことや、電車について知っていることを友達と話し始めたので、教師も親子遠足で、電車に乗って新川公園に行ったときのことを話題にした。幼児も思い出して「うちのそばを通ったんだよね。」「うちだって見えたんだよ。」などとおしゃべりを楽しんでいた。

次々と幼児が集まってきてグループが二つでき、一方のグループは「どうにつなげる。」「いくつつなげようか。」などと電車づくりの相談を始めた。一人一人の幼児が自分の考えを出し合いながら進め、段ボール箱を４個つなげたところで、Ｊ児が箱のふたを斜めにして運転席をつくることを提案した。他の幼児も「そうだね。」とＪ児の考えに賛成し、箱のふたを押さえたり、ガムテープを切って渡したりし、力を合わせて運転席を作っていた。しかし、ハサミでガ

ムテープを切っているの、ハサミにはり付いてしまい、何度も教師に助けを求めに来た。教師が手で切ってやると幼児も手で切っていた。もう一方のグループでは、I児が手でガムテープを切って渡すと他の幼児がはり付け、作業を分担して電車づくりをしていた。

電車づくりの様子を見ていたN児が、「切符がなくっちゃ。」と気付いて言ったので、その言葉が作っている幼児に伝わり、周りで見っていた幼児にも、切符を作って電車ごっこをしようという共通の目当てが生まれた。そこで、切符づくりに必要な紙を用意すると、新たな幼児も加わって切符づくりが始まり、紙の大きさを決めたり、「切符になんて書く。」と相談したりして作る姿が見られた。

電車や切符が出来上がると、すぐに乗って階下の遊戯室へ行ったり、年少組の廊下を通ったりして遊び始めた。興味をもった年少児を乗せてやったり、切符のやりとりを教えたりして年少児とも自然なかかわりが生まれた。教師も電車ごっこのお客になって遊びに加わり、幼児と一緒に遊びの楽しさを共有し、取組を認めて自信がもてるような援助をした。(図2)その後、晴れた日には電車を園庭に出すと、幼児は固定遊具を駅に見立てて、「ブランコ駅に行きます」「乗りませんか。」などと友達を誘い、電車ごっことピクニックごっこが結びついた遊びが展開された。また、遊びながらイメージがふくらんできて、「ここはジュースを置くところ。」「ご飯も食べられるんだよね。」などと相談しながら、電車にいろいろな部品をつけて楽しむ姿も見られた。



図2 作った電車に乗って遊ぶ幼児

以上のことから、友達のよさを認めたり、考えを受け入れ合ったりして共通の目当てをもって遊びを進めるようになったこの時期、物的環境として大きさがそろった段ボール箱がたくさん用意してあったことは、目当てに合わせ、いろいろなものに見立てて使ったり、共同で作ったりできる材料として適切であったと考える。また、友達とかかわって遊びを進める中で、一人一人の幼児のよさを受け止めたり、友達と力を合わせて取り組む姿を認めたりした教師の肯定的な援助は、幼児が目当ての実現に向けて考えを出し合い、ルールを守って楽しく遊びを進めるために有効であったと考える。

研究のまとめと今後の課題

- 友達とかかわりルールを守って楽しく遊びを進める幼児を育成するために、ごっこ遊びにおける環境の構成を工夫してきた。その結果、幼児はいろいろな友達とかかわり、自分の考えを出しながら遊び、友達といざこざを起こしたり、葛藤^{かっとう}を体験したりして、遊びに必要なルールを生み出していった。幼児はこのような道筋を通して友達の話をよく聞き、友達と相談して、考えを受け入れ合い、楽しく遊びを進めていくようになることが分かった。
- 環境の構成の工夫として、幼児の思いや動きをつなぐことに視点を当て、物的環境の構成や人的環境の構成を行ったことで、幼児は友達とのかかわりが広がり、刺激し合ってイメージをふくらませ、互いに考えを受け入れて楽しく遊びを進めることができた。幼児の思いや動きをつなぐためには、幼児と一緒に遊ぶ中から興味や関心の方向をとらえたり、発達の実状に合っていることを確かめたり、友達関係について把握したりして、それに基づき、幼児が友達とかかわって遊ぶと楽しいと感じられる環境を構成することが大切であるとする。
- 今後は、幼児が取り組む様々な活動の中においても、思いや動きをつなぐための環境の構成に努め、友達とかかわって遊びに必要なルールを生み出し、それを守りながら楽しく遊びが進められる幼児を育成していきたい。

